

当院のMRI検査における安全管理

公立置賜総合病院 放射線部

○鈴木一紀 芳賀智行 土屋一成

【はじめに】

近年、放射線部を取り巻く環境は大きく変わってきており、検査前に確認しなければならないことは多岐にわたる。MRIは特殊な検査環境により、検査前に患者の装飾品・体内金属の有無、貼付剤の種類など、確認に必要な項目も多くなる。

条件付きではあるが、ペースメーカーやステント、人工内耳などのMRI検査に対応できるデバイスが多く登場してきていることから検査前の確認が必須となってきており、患者が自身の体内金属を把握していないケースにおいては慎重な対応が求められる。

とりわけ循環器領域のデバイスを挿入している患者においては、自身の体内に金属を挿入されているという認識をしていますが、その種類まで把握していないことが多い。

そこで今回は当院での体内金属を有する患者に対する取り組みを、循環器領域を中心に紹介する。

【取り組み】

- 体内金属挿入時にRISに記載する上で、検査依頼書にて体内デバイスの存在を把握
- 前日に体内金属が無いかを過去画像で確認
- 検査当日に問診表やチェックリストを記載
- 更衣前には助手さんからの注意事項説明
- 検査室入室前の技師による金属や貼付剤のチェック
- 体内金属インプラントのある患者には1.5T-MRI装置で検査
- 各デバイスにより条件が異なるので、安全性の確認のため循環器デバイスの添付文書をまとめ、添付文書に記載のある条件を満たすように検査できていることを確認した。

この他、患者本人が忘れていて、過去に持ち込みがあったものもあるので、掲示物での注意喚起も行っている。

条件付きデバイスの挿入時には、カテ室担当技師が挿入した日付とデバイス名をRISや電子カルテに記載し、MRI非対応のデバイスにおいては検査オーダー自体出来なくなるという工夫もとっている。

このような対策をすり抜けてインシデントとなったケースもあるので、体内金属の持ち込みを防げるよう、その都度他部門と情報共有して体内金属の持ち込みが無いように工夫している。

【まとめ】

検査条件を守ることとともに、体内金属挿入時の患者情報記載。検査オーダー時の依頼医への注意喚起、検査前日の体内金属の有無のチェック、検査当日の確認事項の徹底と他部門との情報共有と連携により、安全に検査を実施できている。